

O3-007

在籍保育所における親子療育教室の意義
-第6報- 発達の気になる子どもをもつ
親の育児ストレスへの支援橋本かほる¹、竹内 恵子²、津田 明美³¹京都先端科学大学健康医療学部 言語聴覚学科²福井大学教育学部³福井県こども療育センター

【はじめに】

福井市では、特別な配慮が必要な子どもへの支援を強化する柱の一つとして、公立保育園の研究指定園における親子療育教室(教室)の研究を2012年から継続し、今年度で12年目となる。療育の対象となる発達の気になる子どもについての発達のアセスメントには、行動観察、発達検査などを用い、包括的な評価が可能である。一方で、親の内面へのアセスメントは現場の保育士にとって課題とされており、具体的な保護者支援につなぐににくい。そこでわれわれは、親の内面的なストレス状況を調査し昨年度本学会で報告した。今回は、親の育児ストレス内容をふまえた保育士の保護者支援について報告する。

【目的】

発達の気になる子どもをもつ保護者支援を行う際に、課題となっていた保護者の内面的なストレスについて理解すること、さらに保護者の育児ストレスをもとにした育児支援計画の立案と実施より、保育士自身の保護者支援のスキルアップについて検討する。

【方法】

発達の気になる子どもを担任する保育士への育児支援アンケート調査を年2回実施し、内容について分析した。1回目は親子療育教室終了直後に、親の育児ストレス調査(日本版PSI)結果より、保育士が気づいた点と具体的な育児支援計画について調査した。2回目は6か月後に実施し、プレアンケートからの育児支援計画の取り組みについて調査した。

【結果】

保育士がふだんの関わりで感じていた担当児の保護者の様子と育児ストレス結果との相違点について、子どもに関する育児ストレスの側面については保育士全体の87.5%がほぼ一致していたと回答した。一方で、親自身に関する育児ストレスの側面についてはほぼ一致していたと回答した者は25%であった。保護者支援に関しては、対象者の全員が親の育児ストレス調査は保護者理解および支援に有効であると回答した。母への直接的な対応については経験年数にかかわらず記述があった一方で、子どもの発達理解を含めた対応について記述しているものは経験年数が17年目以上の保育士であった。発達の気になる子どもをもつ保護者支援を行う際の保育士自身への支援として、育児ストレスの情報は有用であると考えている。

O3-008

テキストマイニングを用いた親子の
絆づくりプログラム'赤ちゃんがきた!'
の効果の検証原田 大輔^{1,2}、安達 有梨²、木村美貴子³、小西 知子³、
阪本 夏子¹、鈴木 志帆³、高橋 唯³、八木利津子²、
峯 真由美³、柏木 博子¹¹地域医療機能推進機構(JCHO)大阪病院 小児科²桃山学院教育大学人間教育学部 人間教育学科³地域医療機能推進機構(JCHO)大阪病院 看護部

【背景】

親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた!”(BP:Baby Program)は、生後2~5か月の第1子を初めて子育て中の母親を対象をしぼった、構造化された参加者中心型の子育て支援プログラムであり、全国の自治体で導入されている。我々は主に自院で出産した母親を対象に2012年からBPを継続している。本研究の目的はBP参加者が感じるプログラムの効果を質的に検証することである。

【方法】

2018年~2023年に病院主催のBPに参加した母親196名を対象に調査した(回収率96.2%)。その中で自由記述欄に記載のあった125名分の文言をテキストマイニングソフトKH Coderを用いて分析した。

【結果】

出現回数3回以上出現した抽出語数にしたがって頻出語リストを作成した。頻出語を検出した結果、総抽出語数8,613語が確認され、共起ネットワークの描画図からは、10個のカテゴリーに分類された。最も強い共起グループからは、「プログラム」が、同じ「月齢」の「赤ちゃん」を育てる「お母さん」にとって「たくさん」の「会話」や「楽しい」「時間」を生み、「他者」と「交流」の機会となったことがうかがえる。また、それに連関して3つの共起グループが派生した。それぞれ「育児」「不安」「頑張る」「違う」「意見」「参考」「嬉しい」などの群と、「良い」「改善」「自分」「子育て」「悩む」「安心」「人」「話す」などの群、「悩み」「持つ」「共有」「情報」「交換」などの群が検出された。一方、中心性から遠方に「今」「月」「気持ち」「解消」「過ごす」が含まれる群と「小児科」「相談」「大変」の群や「同じ」「病院」「聞く」が個別群として検出された。

【考察】

共起ネットワークの結果から、子どもの月齢が近く、育児という共通体験をしている母親同士がBPで交流することで、さまざまな意見を聞き、悩みを共有できたと推察される。また、派生の共起グループからも、オンライン版BPでも参加者同士の交流や改善がはかれたと考える。さらに、個別群からは、出産した病院でのBP参加に繋がったことや、小児科医に相談する時間よりもBPによる子育て仲間づくりの効果が勝ったと考える。

【結論】

BPは、月齢に近い乳児をもつ母親同士が参加すること、参加者中心型であること、病院で行うことなどにより交流と情報共有が促され、育児ストレスの解消につながる。